

2021. 6. 22 (火)

日常・非日常と価値観の関係

野瀬 正治

はじめに

本日はチャペルメッセージの機会を頂きありがとうございます。今日、頂いたテーマは日常と非日常です。コロナ禍が私たちの日常を様変わりさせているわけですが、きょう私がお話をさせていただきたいことは、日常と非日常の具体的側面である現象すなわち、いわゆる実際の活動や出来事が、その底流にある価値観の裏付け、これがあるかないかによって日常化するかしらないかが決まるという点です。もし持続性のある価値観につながる非日常なのであれば、その非日常、すなわち新しい活動や出来事は、いずれ日常の活動や出来事へと変化するという点です。

過去のニューノーマル（新常态）とそのゆくえ

最近ニューノーマルという言葉をよく聞きます。日本語では新常态と訳されていますが、実はこの言葉は2008年のリーマンショックの時に世に出た言葉で、最近またよく聞くようになりました。リーマンショックの時は、経済領域での問題発生が経済社会に大きく影響を与え、そして社会全般に波及していきました。しかし、経済問題が社会に影響

を与えたのは、何もリーマンショックだけではなく、1973年のオイルショックや、1990年代のバブル崩壊も同様でした。

今回のコロナ禍も新常态、つまりニューノーマルという点で共通していますが、コロナ禍は、人間の協働のあり方に強く影響を与えて社会に波及している点で、これまでと大きく異なっています。きょうのテーマのキーワードの日常と非日常でいえば、普通に集まって協働して何かをするという日常の諸現象がウイルスのために非接触、ソーシャルディスタンスなどが求められ、結果としていろいろな非日常の諸現象として発生しているわけであります。

しかし、切っ掛けは別として、実は歴史はこうした変化の連続で今日に至っています。長らく続いた日常が、何らかの切っ掛けや原因で非日常の現象が発生し、その非日常の幾つかは、いつしか常態化して日常として定着していきます。そして、その一方では、非日常化した原因がいつの間にか時間とともに希薄化し、別の言い方をすると、価値観の変化には至らなかった幾つかの非日常は、いつしか元の日常に戻ります。

近代の始まりでは

先ほど、歴史はこうした変化の連続で今日に至っていますと申し上げましたが、近代社会の始まりを例に挙げれば、『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』でウェーバーは、近代資本主義の基本的枠組みである投下資本の原価回収計算の考え方の基礎を創出し広く定着させたのはプロテスタントの価値観があったからだと指摘しています。確かに江戸時代の江戸は、規模的には世界的大都市の一つであったのですが、いくら金銭蓄積を増大させて規模を拡大させたとしても、近代の資本主義社会とはいえず、江戸は近代としての新常态にはならないのです。

またウェーバーは、当時、出来高払い制度の調査をしているのですが、敬虔（けいけん）なキリスト教信者への調査結果では、その敬虔なキリスト教の信者は出来高払い制を活用して高い賃金を得ることができることが分かっている、出来高払い制度でさらに高い賃金を獲得しようとは行動せず、短時間でほどほどの収入を得るような行動を選択することを指摘しています。すなわち、余裕時間を作り出し、信仰に時間を割くことを優先させたわけです。価値観が行動の選択に強く影響を与えているのが分かります。

日本の近代では

日本の例でも一つお話をさせていただくと、例えば明治維新後、近代国家の形成が進んでいく中で、政府が、当時において個人主義的な進歩的な家族関係規範を導入しようとした時、1890年に穂積八束は保守的な立場から「民法出デテ忠孝亡（ほろ）ブ」と言

って、当時の日本の忠孝の慣習が損なわれると言いました。結果としては、そのようなことはなくその後の経緯を見れば分かるのですが、当時の儒教文化に支えられた価値観は、日本的な忠孝の慣習を定着させていきました。新しい法律が登場したとしても、文化となった価値観が従来の日本的忠孝を常態化したわけです。規則やルールが変わっても価値観が変わらなければ、実態はかわらないのであって、すなわち新しい現象は定着しないといえます。結果として価値観の裏付けがなければ従来の日常は大きく変わらないともいえるわけです。

コロナ禍のニューノーマルでは

昨今の例として、コロナ禍とテレワークの例でいえば、緊急事態宣言やまん防が発令されるとテレワークの実施率が上がるのですが、テレワークが常態化するかどうか、日常化するかどうかは、テレワークを実施する者の価値観に影響されると思われる点が挙げられます。つまり、みんなと一緒に集まりながら仕事をするを優先する価値観が強い集団では、アフターコロナで、いずれテレワークが今ほどには利用されないことになるわけです。

もちろんその一方で、コロナ禍を機会にテレワークを利用して、結果として生産性を向上させることを実感した集団は、これまでの仕事の仕方を改め、テレワークを利用することに価値観を変容させていきます。そして、これまで利用していなかったテレワークを積極的に利用するようになるでしょう。すなわち、テレワークをあまり利用しなかった集団の一部は、コロナ禍を機に価値観を変容させ

て、テレワークをよく利用するようになると、非日常がいつか常態化し、テレワークが日常となるわけです。

私の場合（結びにかえて）

最後に、コロナ禍による私の非日常が日常化しつつある例をご紹介します。実はここ1年ほどの私の変化の一つとして、料理をするようになったことがあります。1年ほど前の初めの数回の料理は、文字通り単なる非日常でしかなく、そのきっかけはコロナ禍であったわけです。ウイルス感染回避のための非日常の状況が発生し、具体的にはステイホームやオンライン授業により、家に夕方いることが多くなりまし

た。好むと好まざるとにかかわらず料理をする機会が多くなるのは、時間的、場所的に自然な帰結でした。

しかし切っ掛けは別として、実際に料理をいろいろすると、ことのほか楽しいことに気づいたわけです。楽しいという気持ちが価値観の変容を起こさせて料理をするようになったような気がするのです。そして、なぜ今まで料理をしてこなかったのだろうと考えるようにもなりました。アフターコロナにおいても、料理は非日常ではなく、日常となるのではないかと感じています。

きょうは日常と非日常というテーマについて考える機会を頂き感謝しています。ありがとうございました。私の話を終わります。

（社会学部教授）